

特59

925

金田
氏
朝
倉
傳

092023-001-8

特59-925

[繪本]

今井七太郎

M21-22

DBP-0824



特 59

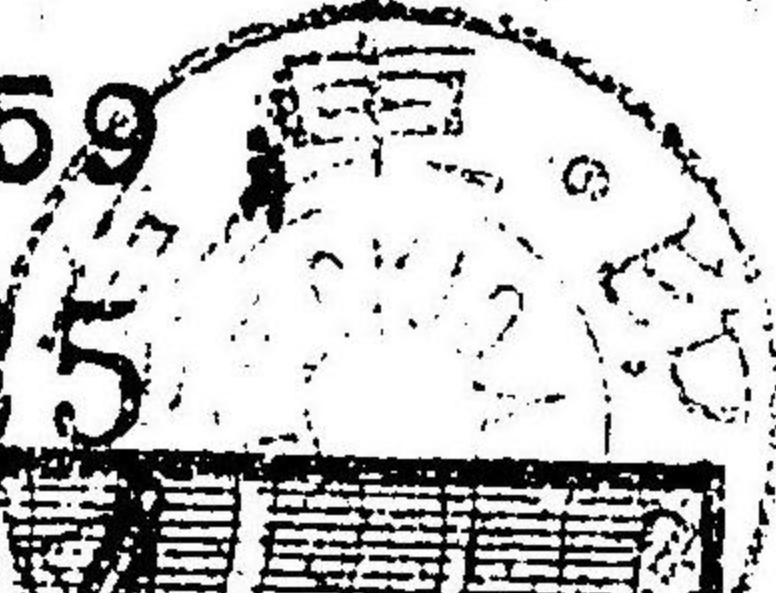
925

鎮西
八良為朝會博



特59

925



為朝

No 9429



大皇五十六代清和天皇



の時は當り平家朝臣
 豆州大島に流るる源為朝
 女子島鬼の島を廻りんと
 島長を呼て尋ふふ
 畏にきりて此島あり
 う無りハ存りて
 折柄彼方と
 ながるる島あり
 為朝之れを見て
 島ありてを
 舟を出して
 一のしきと
 此処は青の

為朝三

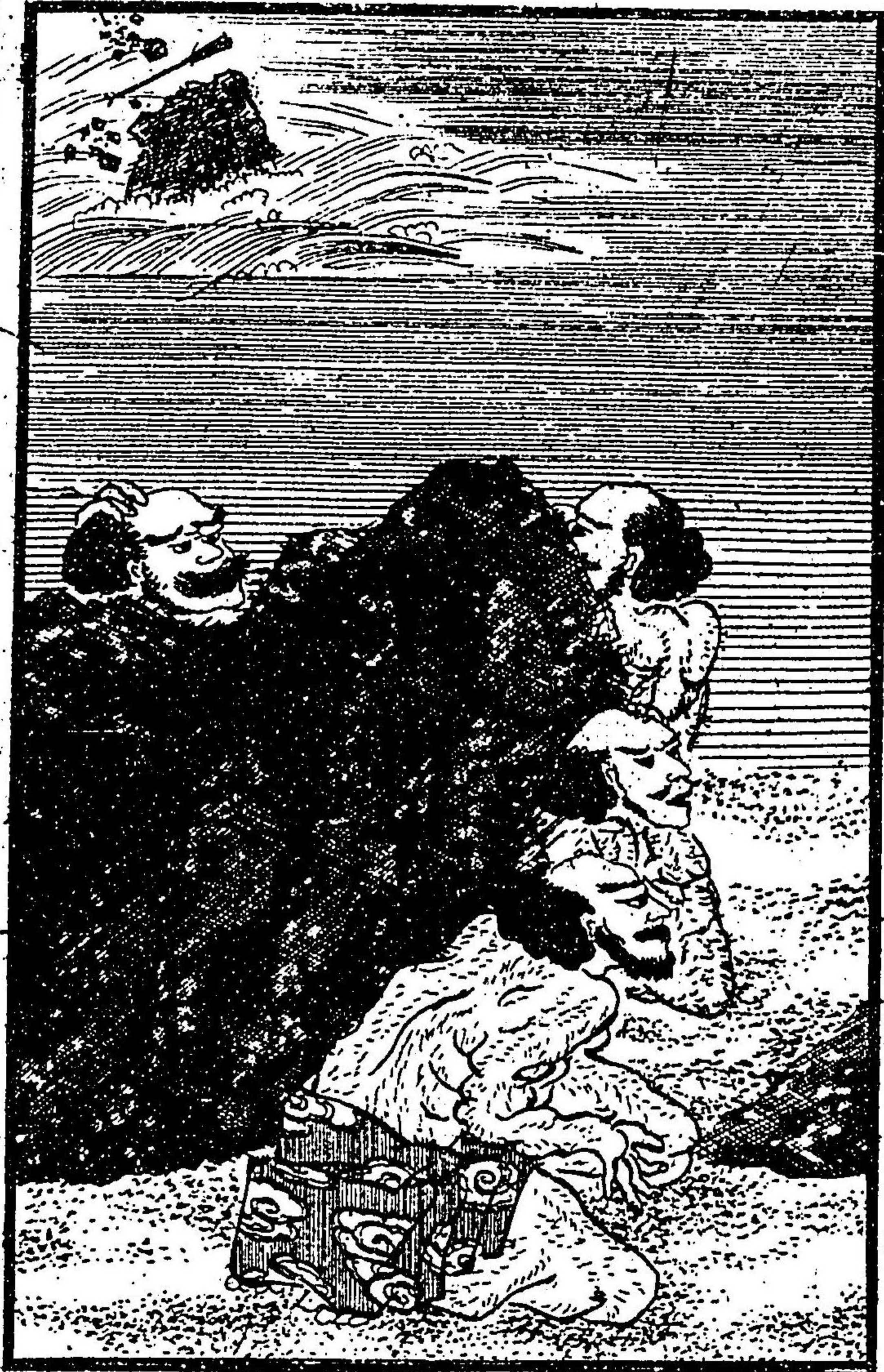


扱し為朝ハ從
 者四人を連れ
 て女護の島に
 お渡りて
 此國の女を
 長と云ふ
 女神の
 うせまより
 て日の本の語
 知て為朝と仮
 契りと結ひて

為朝



十子島物産
 三年ぶすび



為朝

四



男子二人を設り
太郎九二郎九と
云へり益は名物
三年茄子とて
種を植載て歳
一大ききなりて
時侯よりて
日本に邦より
異なる



為朝ハ男子島ヲ渡リテ女島ト合併
進ムルニセリレシム島人の氣勇ニ
討トせんナリ様多クシカハ為朝討
以テる大弓ヲ滿月の如ク引
汝ガ裸ト彼ガ岩といツレガ
面キト島人ウ恐レテ白ク
岩ハウタガ故ニ討ト
為朝笑テ
岩ト
討テ
勇

為朝
五



島長
名ト鬼夜
ゆひテ為朝
従ヒ願ふる忠
男子島を以テ非島
女子島ハ即島
八丈島



舟を援へ
茂久怒々
為朝を証哉
鬼夜丸
家を焚て
為朝を介して
義子死す

三郎太夫忠重

為朝

六



三郎太夫忠重ハ大島ノ
太守子ヲ為朝未渡
以乘うらむ事
ありて伊豆ノ
太守茂久マ
為朝を
討人ト
其舟を
為朝
重と弱



伊豆大島と出て為朝
四國を去り
それより
九州を渡り
八代進傍
より阿蘇山
の麓を去り
りふふ大猪
矢を受けて
猛骨を頭
て駈去りたれ



為朝足
蹴殺
あふふ
獵夫
去り
此林
見て大
酒を進
為朝と
此酒は

為朝
七



あくまで獵師婦夫
 為朝をとりへて山路
 までつれ行り
 白蛇姫の家臣
 平治と勇太を
 めて平家と敵
 として為朝はあいて十年
 辛苦を物語りて是
 まりく勇太をつり
 乗取と云ふ男子
 安産しゆひ東國

為朝八



為朝八





為朝
九



為朝ハ東國ヲ源家ヲ集メテ
平ノ清盛ヲ亡ボさんと九州
ヲ出立しゆふは漢夫寺集
まりて徳好の品を奉るも
て深くその徳を慕はん
別れしやうのあはれ

爲朝舟出仕のひんれ
 ハ背ぐるむざりを向く
 みろ舟ハ東をさし
 て矢おいる如く走り
 なるが俄う天曇り
 て舟ハ覆らうり三男
 士も白縫姫も漂屑
 とある爲朝平家の運
 強きを嘆息して坊
 服して死せんとす時
 又天狗數多赤り今



爲朝

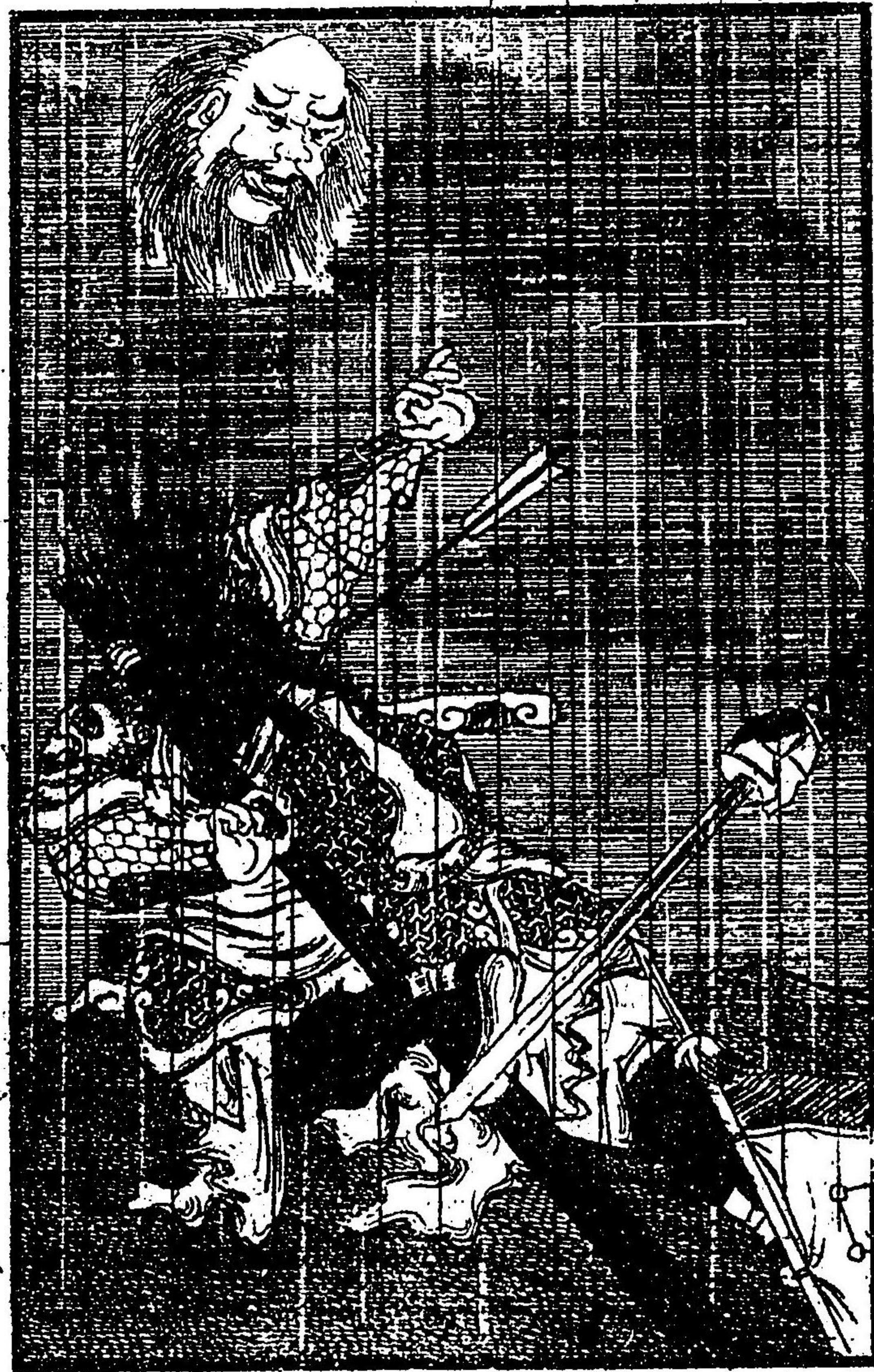




日本の南端一島ありて琉球
 國と云ふ國王尚寧暗愚よりて
 徳るく國々を寄りて不思儀の
 事をも多し山上古塚あり
 て悲鳴を尚寧王怒つて土人
 一命して塚とあはれし不思儀
 塚四方へ散乱し真僧出て尊信と
 求めて名を塚雲と呼ぶ偶獸を出し
 害を加へ忠臣を國辱を失ひ王を殺
 して妖術を以て自ら遂に國王
 あり先王の女此難を小琉球に遷す



天皇五十六代清和天皇の御
 宇の事あり高朝小琉球を
 漂着しつひ王女率て女を
 介けて環雲園師と名け
 うひて妖術ありて大敗し
 つひに島袋を火に包まれて
 高朝死さんとせしが馬のふ
 くちり入て火を避けて
 再び王女を逢て念く琉球
 雲を討人王を討て紀
 平治景九に廻り逢て
 毛國島の子孫志臣赤
 命等と謀て遂に精神の介
 り依りて環雲を討て琉球國
 を定平しと云ふ事あり



高朝 十二



鎮西八郎源為朝

明治廿一年三月十五日御座
京都府下京区十三組京極町十三番戸
著作兼発行者 今井七太郎

明治廿一年三月五日印刷成坊
京都府下京区七組衣笠町北三番戸
印刷者 伊藤 伊之助

大賣捌所

寺町松原北八入
今井七郎兵衛

